

孤独—カフカとキルケゴールの場合—

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

カフカのように孤独に

「私は孤独です……フランツ・カフカのように。」これは、カフカ自身が年下の友人グスタフ・ヤノーホに語った言葉である。この言葉はそのまま、マルト・ロベールのカフカ論『カフカのように孤独に』（東宏治訳、平凡社ライブラリー）のタイトルにもなった。カフカは、彼自身がカフカである限り、どこまでも孤独であると感じていた。『変身』、『審判』、『城』など、カフカの主要作品にはいずれも孤独の影が差している。彼の孤独は、家父長的な父親との軋轢、また複数の恋人との婚約とその謎の解消にも関係している。その点で、信仰深い父親の下で精神的葛藤を経験し、またレギーネと婚約しながらも自ら破棄し、なおかつ生涯彼女を愛し続けたキルケゴールの姿とも重なるものがある。

キルケゴールは、『おそれとおのき』の中で、神の命ずるまま子イサクを燔祭に捧げようとしたアブラハムの解釈を行った。その背景には、彼自身が神への愛のためにレギーネとの婚約破棄に至った体験がある。彼がこの著作の中で訴えようしたのは、神の前にある信仰者は単独者でなければならないこと、そして単独者とは倫理的な意味では決して普遍化できない例外者だということである。例外者に与えられる試練には、時に人間として痛ましいものがある。カフカは『おそれとおのき』を読み、自らも深く共鳴するところがあった。もちろん 20 世紀前半の不条理のユダヤ人作家と 19 世紀後半のキリスト教実存思想家とは、その思想及びその背景が大きく異なり、両者を比較検討しようと思えば、1 冊の本を書かなければならなくなるだろう。ここでは、彼らの友人関係に光を当てながら、孤独という一点についてささやかな比較を試みたい。

交際と孤独とは相反するものではない。人間関係を保ちながらも、人は孤独を愛し、孤独を楽しむことができる。カフカもキルケゴールも、友人たちと食事をしたり談話に興じたりしたが、一人である時には靈感に満たされ、独創的な執筆活動に勤しむことができた。その意味で、両者はともに“ひとり上手”であった。さらに言うなら、自らの孤独を分かち合える友人がいれば、孤独であっても、決して“ひとりぼっち”ではない。だが、その点では両者は違っていたのである。

カフカの場合

カフカの友人と言えば、彼と無二の親友で、その死後にその著作を刊行し、詳細な伝記も書いたマックス・プロートの名前が第一に挙げられよう。カフカにはまた、自らの孤独を語ることできた年下の友人がいた。この若き聞き手こそ、グスタフ・ヤノーホである。彼は実科学校の生徒だった 17 歳の時、プラハの労働者傷害保険局に勤めていた父親の紹介で、彼の同僚のカフカと初めて面会した。ヤノーホはこの 20 歳年上の友人と折あるごとに対話をして、それを克明に記録した。それらの対話一つ一つが、生身のカフカを伝える貴重なドキュメントであり、我々は現在これを『カフカとの対話』（吉田仙太郎訳、筑摩書房）として読むことができる。「カフカのように孤独に」という言葉も、この書物の中に、カフカの科白として出てくるものだ。カフカは孤独だったかもしれないが、自分が孤独だと

語れる相手を持つ以上、決してひとりぼっちではなかった。

ヤノーホはどちらかと言えば、一方的にカフカとの交際を求めていた。しかし、カフカのほうも積極的に応じて、自らも楽しんでいた節がある。彼はヤノーホの詩を読んで批評し、時にその悩みの相談に耳を傾け、適切な助言もしている。またプラハの街を二人で散策しながら、文学、宗教、思想、政治などの話題を交わしている。『カフカとの対話』では、カフカの姿が他を圧する主旋律としてあるが、それと同時にヤノーホの父親のことも控えめな副旋律のように奏でられている。だが、その結末は悲劇的だった。ヤノーホの両親は離婚訴訟に至り、カフカは結核のために退職して、彼の前から姿を消す。そしてヤノーホが 21 歳になった 1924 年、彼の父親は自ら命を絶ち、カフカも 41 歳を待たずして逝ってしまったのだ。

キルケゴールの場合

一方、キルケゴールはどうか。彼にはエミール・バーゼンという牧師の友人がいた。彼とは臨終の床でも対話しており、それは断片的であるが、死を目前にしたキルケゴールの姿を伝える貴重な証言となった。しかし何と言っても、キルケゴールが自らの思想を語りたかったのはレギーネであった。だが、自分のほうから婚約を破棄し、後に他人の妻になった女性にそのようなことはできるはずがない。彼は結局、万感の思いを込めつつ、「かの単独者」に向けてその宗教的著作を著した（そういうこともあって宗教的著作はいずれも実名で執筆した）。

キルケゴールは若い頃、一時期コペンハーゲンの文学サロンに所属し、アンデルセンとも親交があった。ただ、彼はアンデルセンに対して辛辣な批評をするばかりで、両者の間には共感的な交流は生まれなかった。彼はまた、甥や姪から慕われたことが伝記から読み取れる。しかし、彼らはキルケゴールの深い思想的対話に入るには幼すぎた。結局、現実生活の中では、自らの思想を分かち合う生身の人間は誰もいなかった。その意味で、キルケゴールは孤独であり、なおかつひとりぼっちであったのだ。

なお、キルケゴールはひそかに童話を愛していて、自らも創作したいと思っていたようである。実際、彼は宗教的作品の中で、アンデルセンを思わせるような童話的文体を駆使している。芥川賞作家の室井光広は、『反復』（ゲンテールセ）とアンデルセンの名前とをもじって、そのようなキルケゴールの姿を童話作家「ゲントルセン」と命名した（『アンデルセンとキルケゴール』講談社）。ゲントルセンの「セン」はデンマーク語で「遅い、遅れる」という意味でもあるから、ゲントルセンとは「遅れん坊」、そこから転じて弟分ということにもなる。けれども、アンデルセンにとって 8 歳年下のキルケゴールは決して弟分ではなかったし、キルケゴールにも弟分はいなかった。

もしキルケゴールにとって、カフカにおけるヤノーホ、あるいはゲーテにおけるエッカーマンや芭蕉における曾良のように、一步遅れてついてきつつ、孤独を分かち合える弟分がいれば、キルケゴールの知られざる姿が後世に伝わっていたかもしれない。だが、残念なことに、そのような弟分は、彼にとっては見果てぬ「ゲントルセン幻弟生」であった。